

## 『津軽古今大成歌集』について

松谷 麻美

『津軽古今大成歌集』とは下沢保躬により編集された和歌集である。『津軽古今大成歌集』に納められた和歌は永禄年間（1558~1570年）から明治10年代（1868~1878年）までの津軽に関わりのあるものであるが、今までに研究対象とされたことがないので、その構成から内容に至るまでは明らかにされていない。

奈良時代から現代まで多くの人々に詠まれている和歌は、その時代における詠まれた地域の情景や詠者らの関係性や社会的背景などを知る手がかりとなる。しかし江戸末期から明治期における津軽地方に関係する和歌集は現存しているものが少ないためにその時代の津軽地方の和歌の世界に関する研究はほとんどされていない。ゆえに『津軽古今大成歌集』は江戸末期から明治期にかけての津軽地方に関する和歌の世界を明らかにする上で重要と言える。

本研究では『津軽古今大成歌集』の内容を明らかにすることを目的とする。

研究をするにあたり『津軽古今大成歌集』全文を翻刻し、内容を明らかにした。その上で、『津軽古今大成歌集』の構成や和歌や詠者について考察を行った。

それにより、『津軽古今大成歌集』には和歌が4034首、連歌が2点、漢詩が1点納められ、それらは延べ646名の作品であることが分かった。また歌人名の箇所には他にも歌人の実名や通称、家族関係などが記されていた。和歌の後に文章で歌人の紹介を行う場合もあった。その他にも第20巻では和歌の記載はないが、歌人の紹介を行っている節もあった。特に歴代津軽藩主や家老などの藩に関係する位の高い者の紹介は20巻と付録で詳しくされている。以上のことから『津軽古今大成歌集』では歌人の紹介をよく行っていると言え、これは『津軽古今大成歌集』が津軽地方を詠んだ和歌を編纂したものではなく、津軽地方で活動している歌人の和歌の編纂を目的としていたからだと考えられる。

本研究で構成や歌人などを知ることはできたが、本文中の歌人の紹介について、他の資料を用いてその正誤を検証することが今後の課題である。

(指導教員 綿抜豊昭)